
Ecco la canzone[エッコラカンツォーネ]

章-aquila-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E c c o l a c a n z o n e 「エッコラカンツォーネ」

【Nコード】

N 2 6 7 9 F

【作者名】

章一aquila一

【あらすじ】

夢の音を聴くのが好きな少女がある日ある朝に、少し変わっていて不思議な獣人の歌い手に出会った。そこから曲《物語》が始まった。歌い手は言う「歌姫の望むままに……」数々の歌が溢れし世界に抱かれて少女の聞く歌は、誰の歌なのか――

一日一（前書き）

この『Eccola canzone「エツコラカンツォーネ」』にはイラストがあります。

以下のサイトへアクセスしてみてください。

携帯対応版までの避難所

※はてなダイアリーを携帯用サイトに流用

<http://d.hatena.ne.jp/Aquila-AK/>

自創作物サイト【KapitelDonner】

<http://kapitelDonner.yokochou.com/>

一日一

Ecco la canzone 日の射す広場

私の初めての音は、この世界が始まることを教えてくれた。

その音は、私を温かく包むように、絶え間なく聴こえてきた。

私がいた暗い世界には、光は届かなかった。

手を差し伸べても貰えなかった。

でも、その音だけは私に手を差し伸べやさしく語りかけてくれた。

やがて私の世界に光が満ちていて――

そこには、その音が溢れていた。

そう、この音……この音で私の世界は始まった――

「……んゝ ふわゝ……」

目を擦り、大きなあくびをしながら、ベッドから身体を起こす。

「う…… うゝん」

窓からは光が射し込み、外からは小鳥達の鳴き声が鮮明に聞こえてきた。

「今日はあの音を聴けた……よかった」

私は夢で聴くあの『音』が大好きだ。でも夢以外で、その音は聴いたことがない。

生まれてから、少なくともこの王都では、まだ聞いたことがないのだ。でも、私はそれを探そうとしなかった。

なぜなら、夢で聴き続けることが、このままできるとおもってい

たから。

——だが

ここ最近、夢でその音が聞けなくなってきた。月に数えるくらいしか聴けない。

それが私にとって、いま一番の悩みになっている。

「んん」

——背伸びをしながらベッドを出る。

「……学校いこうかな」

クローゼットへ行き、制服を出して着替えた。

——王都の裏通りを歩きながら、朝食のサンドイッチを一口かじり——そして鼻歌を1小節口ずさむ

それを、ゆっくり歩きながら繰り返す——

「♪」

裏通りはとても静かだ。

いまは陽が上がったばかりの早朝なので、なおさら、ひと気がなく静かだった。

「♪」

他の音が聞こえず、私だけの音が響く……私はそれが、すごく心地よい。

歩きながら鼻歌を歌うのが好きだ。特にこの裏通りで歌うのが大好きだ。裏通りは騒音もなく、人もあまり歩いてない。長い壁面に囲まれ道はまるで、図書館や学校の回廊を歩いているようだった。

だからよく響き、すごく心地が良い——

私はいつも早めに家を出て、ここをゆっくり歩くことにしている。
「♪」

反響した音が澄み入るように身体に流れ込んできた。

——光が射し込まない裏通りをしばし歩くと、やがて道は広場へとぶつかった。br<

広場の真ん中には噴水があり、そこからいつもの水の流れ落ちる音と誰かの『歌』が聴こえてきた——

『♪♪羽ばたくことを忘れた人は やがて集まり この王都を成し
』

『♪♪空の子らは いまは空を眺めることしかできないけれど』
『♪♪やがていつかは この空へと帰れる』

聴こえてきたその歌声は、すごく綺麗な音だった。

それは、王立楽団が奏でたような気品溢れる音楽ではなく、歓楽街の酒場にドキドキしながら、こっそりと聴きにいった陽気で明るい音楽でもなく……私には例えることのできない、聴いたことのない音だった。

澄みわたる湖面を滑るかのように、歌声は広場全体を駆け巡り、私の耳へと届いてきた——それはまるで、この広場が歌のために用意された『舞台』ではないかと思わせるくらいだった。

聞かずにはいられない、胸をくすぐっていく歌声——
でも——

それは、とても温かく包まれていくような、旋律だった——

——やがて歌は終わり、歌い手は軽く私にお辞儀をした。

「ご清聴、感謝いたします」

噴水の段差に立った、少年とも少女ともわからない獣人族の歌い

手がこちらに歩いてきた。

「こんな朝から、貴女みたいな聡明で美しいご婦人に出会い、そしてボクの歌を聴いて頂けたのは、とても幸運なことですね。女神様に感謝しないと、いけませんね」

歌い手は、広場の教会の方を向いた。

「時に厳しくもあり、時にこんな幸運をも与える……とてもあなた方の女神様は気まぐれだとはおもいませんか？」

「そんなこと、私じゃないんだから、わからないわよ」

「そうですね。女神様の御心など到底、人の仔が分かるものではないですね」

「んゝさてと…… その大樹のエンブレムの入った制服は、アルベロッタ王立音楽院の制服ですか？」

「そうだけど……それがなに？」

獣人族の歌い手は、頭の黒い両耳をピクピクと動かした。

「いえいえ、ただ通学の時間には、まだ少し早いのではないかとおもいましてね…… ただ、そうおもっただけですので、そんなにコワイ顔なさらずに」

歌い手は両手の手のひらをみせ、左右に二回振った。

「何がしたいの？」

「もうそのコワイ顔しないで、聞いていただけますか？」

「内容にも…… よるかな」

「困りましたね…… でも、話さないと前には進めませんね」
歌い手の頭の耳が垂れ下がった。

「いいから話してよ」

「すぐお似合いだなんて…… おもいましてね！」
歌い手は、恥ずかしげもなくそう言って微笑んできた。

「……なにがしたいの？」

「おかしいですね…… 大抵のご婦人は、装いを褒めると喜んでいただけると聞いたのですが……」

「ほんと、何がしたいの？」

「これは、女神様がボクに与えたもうた、新たな試練なのでしょう
か？」

歌い手はチラッと横目で教会を見る。

「私…… 急ぐから」

これ以上、付き合いきれない——歌い手の横を通り抜けて広場の
出口へ歩き出す。なんで、こんなヤツの音が私は気になったんだろ
う？

——私は少し後悔をした。

「深緑の制服を纏いし貴女、少しお待ちなったださいませんか？」
背後から歌い手の呼びかけが聞こえてきた。

私は立ち止まったが、振り向かなかった。「なに？ 私にまだ何か用があるの？」

「こんな街の片隅で、ボクの歌を聴いていただいた御礼に、最後に1曲歌わせてください……」

私は首を横にふった。

「そんなのいらな……」

最後まで私が言い終わる前に、歌い手は歌い始めた。

『♪～またこの地で逢えるまで 私はここで生きてゆきましよう～』

『♪～再びこの地に帰るまで 私はこの地を守りましよう～』

『♪～やがて時が経ち この地が変わったとしても～』

『♪～私だけは変わらずにいましよう ……』

——この歌を私は知っている。

これは、王都に古くからある歌で、王都が長い戦争をしていた時代の歌だ。

戦争へ行く男性と、それを待つ女性の歌……戦争に行かないでと言いたいが、それを言い出せない、それを言っではいけない……だからせめて、自分があなたを待っていることだけでも伝えたい……そんな悲痛な想いが込められた歌だった。

平和になった今では、男女に限らず再会を願う歌として、広く人々の間で歌われ続けていた。

『♪～幾つもの夜が終わり 何度目かの太陽が上がった日に……』
震えている。私ではない——広場全体が震えていた。

周りを囲む建物も、そして噴水の水までも、歌い手の歌に呼応するかのように、震えている。

やはり聞かずにはいられない、胸を締め付けるような歌声――

『♪再びこの門を ……』

――私はいつの間にか歌い手の前に立っていた。

そして、私は歌い始めた。

「♪くぐりやってくるアナタを 私は迎えることでしょう ……」

「♪再び」

『♪君と』

歌い手が私に手を伸ばす。

「♪アナタと」

私は歌い手の手を掴む。

『♪この地に生きれる日を思い行く ……』

「♪この地で生きれる日を願いつつ ……」

歌い手は、私の手を引き寄せ――そして、そっと押し返し手を離れた――

――この歌は男女の歌で、元々は男女二人で歌う歌だった。

長い年月がたつたいまでは、一人で歌うのが当たり前になってしまっていたが男女が歌って初めて、この歌の伝えたい思いがわかるような気がした。

歌い手が私の手を両手で握ってきた。

「貴女も歌われるんですね！」

「えっ…… うん。私の知ってる歌だったしね」

「良い声をお持ちで！ さすが王都音楽の最高学府アルベロッタの生徒様ですね！」

歌い手が握る私の手に力がこもった。

「私より、君の声の方が、すごく綺麗だったよ」

「それは、お褒めくださり、ありがとうございます……よろしければ、貴女の…… いや、麗しき歌姫様のお名前をお聞かせくださいますか？」

私の握られた手に、さらに力がこもった。

「その前に……手を」

「ああ……これは失礼いたしました」

歌い手は、手を離し軽く頭を下げた。

「私の名前はアメーリア・ルティオスよ」

「アメーリア……アメーリア様ですね！ 実にお美しいお名前ですね…… 今朝は本当に幸運に恵まれていますね」

歌い手は、リボンの付いた尻尾を嬉しそうに揺らし、その場で踊ってみせた。

「あのさ……」

「はい？ なんでしょうか？ 歌姫アメーリア様？」

歌い手は踊るのを止めた。

「とりあえず、アメーリア様はやめて、アメルでいいから……ええっと君さ」

私は歌い手に顔をグツと近づけた。

「どうされました歌姫アメル？　ボクの顔に何か……ああ、ボクは、自分でも言うのもなんですが、非常に愛くるしい顔をしていますからね。もう、そんなに見つめられたら、照れちゃいます。」

「それは、どうでもいいんだけど」

歌い手は激しくコケた。尻尾と耳が力なくしょげている。

「なんとも、非情な歌姫ですね」

「高い声も低い声もだせて……男の子か女の子、どっちかなって思っただけ」

歌い手が今度は顔をグツと近づけてきた。

「ふふ……秘密です」

にやりと歌い手が笑う。

「そうですね、また再び御逢いできた、その時にお教えいたしましたよう……いかがでしょうか？」

「また、歌を聴かせてくれるってこと？」

「麗しき歌姫のアメルが望むまま……　望めば、ボクは再び貴女の前に現れることでしょう」

何かの聖書の一説を唱えるように歌い手が言った。

「よくわかんないけど……また会えるってことね？」

——その時、広場に人々が入ってきた。
もう街の起きる時間になっていた。

「おや、時間のようですね…… ボクはここらへんで失礼させていただきます。それでは、またお会いしましょうね、歌姫アメル」

歌い手は一礼をすると、広場の奥へと消えていった。

「それじゃ……君の名前だけでも教えて！」

大声で私がそう言うと、振り返った歌い手は口を動かし、そして再び向き直って、広場の奥へと消えてった。

「リオリュクス……ニハーヴァルト ……リオリュクス・ニハーヴァルト」 声は聞こえなかったが、たしかに歌い手はそう言っていた。

「……リオ君か」 彼の消えていった方向にそう呟き、私は学校へと向かった。

今日、新しい音に出会った——
どこか懐かしくて温かくて
また聴きたくなる歌声だった。

一月一

L a l u n a 月夜の再会

夜風が私の顔をなぜる――

部屋の窓に腰掛けて見上げた場所には、光を煌々と籠らせた月がみえた。

いつに無く大きく感じる月に向かって、大きく息を吸い込むと
まるで月の息吹をそのまま吸い込んだかのように、清涼な空気が私
に流れ込んでくる。

「♪♪月が流した涙に そっと小舟を浮かべ そして月へと漕ぎ出
す ……」

「♪♪真っ直ぐと遠くへ続く その白い川を上り 上へ上へと ……」

月を謳った歌は数あるが、私はこの歌が好きだ。月から続く、その
涙の線を辿れば必ず、その涙を流した月へとたどり着けると歌っ
ている。

「♪♪きつと同じ月を見たアナタも 月の海で漕ぎ続け やがて同
じ場所へたどり着ける ……」

この一節から音が無くなり、アカペラでこの曲を歌い続けなくて
はならない。学者達はこの古い歌は、未完成のまま後世に残っ
たとしているが、私はそれは違うとおもっている。作曲者はきつと、
この部分に音をつけたくなかったんだとおもう。

なぜなら――……

歌声が窓のすぐ側から聞こえてきた。

『♪そして、出逢えたならば　そこで出逢えたのならば　同じ月で共に……　永久に共に……』

聞こえてきた歌声は、いつも私が歌う旋律とは異なった旋律で歌い上げた。

この曲は、歌を歌う人に委ねられたパートでは、自由な旋律で歌ってよかった。だからこそ生まれる、この曲が歌う人によって生まれる物語……　そのいくつもの結末に、自分の作った曲の音で左右されてほしくなかった　……だから音を入れずに、人に委ねたんだとおもう。

窓の横にある木を見ると、あの広場であつた歌い手が座っていた。
「……って君さ、そこで何やってるの？」

「歌姫アメルと同じく、今夜は月が綺麗でしたので、夜風に当たろうとおもいましたね……　お散歩中です」
歌い手は、目を細めて私に微笑んだ。

「あっそ……　で、済むとおもう？」

「この美しい今夜の月に免じて、済んではいただけないでしょうか？」

「無理ね」

「うう……」

歌い手の両耳がパタツと前に倒れこんだ。

私は人差し指を立てて、歌い手に捲くし立てたるように喋り出す。
「私の家の木に君は勝手に登って、そして私の歌を横取りして……」

パツと目を見開いた歌い手は、抗議するように尻尾を真っ直ぐに立てた。

「ひ、ひどいですよ！ 歌姫様も、ボクの歌に入ってきたじゃないですか！」

「あれは本来、二人で歌う曲だから……問題ないでしょ？」

立てていた尻尾に力がなくなり垂れ下がっていった。

「歌姫アメル言うとおりにございます」

「分かればいいの、分かればね」

私は勝ち誇ったかのように腰に両手を置いた。

「とりあえず、君、そこから降りたら？」

「いえいえ、お気になさらず！ ボクは高いところが大好きなのですよ！」

枝から下に垂れ下げている尻尾が、嬉しそうに踊っている。

「そう……せっかく、お茶でも入れてあげようとおもったのに」
両手を前で組み、流し目で歌い手をみた。

「え、あ、ほ、本当ですか？」

「ええ、でもいらないうって言うなら別に」

「い、いや、います！ 是非、ボクにお茶を——おわっ！」

慌てて身体を木から離れた歌い手は、バランスを崩してしまった。
「あわわっ」

そのまま歌い手は、私のいる窓へ飛び込んできた。

「ううっ—— いたたっ…… 君、大丈夫？」

私の上に乗っかっている、小柄な歌い手に声をかける。

「はい…… なんとか、この柔らかい物のおかげで助かりました」
そう言ってポンポンと両手で私の胸を触った。

「ち、ちょっと君！ どこ触ってるのよ！！」

「あああっ！ これはボクとしたことが…… すいませ……」

私は渾身の力で歌い手を跳ね除けた。

「ん」

壁に打ち付けられた歌い手は、尻尾と耳が垂れ下がり、歌い手は完全にのびている。

「このバカ！！」

私は大声で歌い手に枕を投げつけた。

「うう…… 歌姫アメル申し訳ございませんでした！ 申し訳！
申し訳ご——」

歌い手が私の足にすがり付いてきている。

「は、離れなさいよ！」

「許していただけるまで、ボクはこうするしか術を知りません！」

「わ、わかったから！ ほら、許す！ 許すから離さない！ ん
もう！！！！」

足に纏わりついた歌い手を全力で引き離す。

歌い手は勢い余って、転がっていつてしまった。そして素早く、
また転がって私の所へ戻ってきた。

「本当ですか！？ ああ寛大なる歌姫アメル様！」

歌い手は跪いて、手のひらを上にし私へのばしてきた。

「ああ、感謝いたします」

「もういいって……」

この歌い手は悪い子ではないが少し疲れる。

「じゃあ、そこで待ってて。お茶いれてくるから」

部屋のドアへ手をかけて、歌い手のほうに振り返る。

「くれぐれも…… おとなしくね」

その声に歌い手は一瞬ビクツとした。

「は、はいです！」

歌い手は丸く大きく目を見開き耳と尻尾をピンツと立てて答えた。

「……っと、お待たせ」

私が二つのカップを片手で持ちドアを開けると、部屋の真ん中で
歌い手が丸くなって寝ていた。

大人しくと言っておいたので、じっとしていたら眠くなったのだ
ろう。

時折、耳をパタパタと動かし、スヤスヤと寝息を立てている。

「もうしょうがないな……」

私はベッドから毛布を引っ張り、歌い手にそっとかけてあげた。

毛布をかけると、歌い手はさらに丸く縮こまった。

「んゝ……ありが……と……です」

寝言なのかよくわからないが、歌い手はそう言って心地良さそうな顔をしている。

「君は本当に…… どの子なの？」

歌い手はそれに答えずに、寝息をかき続けている。

「まあ、朝に聞けばいいかな」

もってきたカップを机の上に置いた。

「――ん」

窓から吹き込む夜風が、少し寒くなってきた。

私は窓を閉めて、もう一枚の毛布をかぶりベッドに横になった。

「おやすみ」

歌い手にそう呟き、目蓋をゆっくり閉じた――

一火一

U n a f e s t a 火の祭

私は夢を見ていた――

そこはやさしい光溢れた世界――

私はそこに一人で立ち、真っ直ぐと前を見ていた。

その先に見えるのは、暗い闇――

闇は光の世界を徐々に侵食していき、やがて――

その闇が私の足元まで迫ってきた時――音が聴こえてきた。

その音は私の周りを『風』のように駆け巡ったあと、私を包み込んだ。

温かいその音の『風』を感じた時、足元まで延びてきた闇の進行は止み、光の世界から闇はいなくなった。

またそこは光だけの世界となり、さらに音という住人と、そして私だけがいる世界になった。

光が満ち、音が溢れる私の世界――

そこには、いつもの夢で聴く『音』が――そして私は目を閉じた。

「アメル…… アメル――」

誰かが私を読んでいる。

「――アメル――！」

「――うう ……ん？」

その声で私は目を覚ます。顔を上げるとそこには、お母さんが立っていた。

「もおゝ今日はお祭りよ？　そうやって、いつまでゆっくりしてるつもりかしら？」

「あ……　そうだった。ごめん」

今日は街のお祭りがある日だった。年に一度の大きなお祭りで『火の祭り』と呼ばれていた。

「食事は出来てるから、さっさと下に下りてきなさい！　いいわね？」

「……うゝん」

「それと……　窓は閉めて寝なさいねゝ夜はもう寒いんだから」
そう言って、お母さんは部屋を出ていった。

「あ！　リオ君！」

昨日、私の部屋で寝てしまった、小さき侵入者を探して部屋を見渡す。

「……いない」

窓が開いてたということとは、もう帰ってしまったのだろうか？

「挨拶くらい、していきなさいよね……まったく」

ベッドから身体を起こし、歩きながら背伸びをする。

机の上にある昨日持ってきた二つのカップが目飛び込んできた。

「ああゝ……カップを片付けないと」

机の上のカップに手をかけると、片方だけ中身が無くなっていた。そしてカップの下にメモが置いてあった。

「……読めない」

獣人語で書かれていたメモは、私には読めなかったが、お茶の御札の言葉というのはなんとなくわかった。

「どういたしまして……」

本人がいないので、メモに向かってそう呟いた。

「君のおかげかな……あの音が夢で聴けたのは」

私は窓の方へ歩いた。

そして窓のすぐ側に見える、昨日の夜に歌い手がいた木を見つめた。

「ありがとう……」

私は窓を閉め、お祭りに行くための支度を始めた。

「おはよう」

下に下りると、テーブルには朝食が用意されていた。紅茶の入ったカップや、スープの注がれたボウルから、白い湯気が立ちのぼって。

「おはようお寝坊さん。食べたらいって、あとで片付けるわ」
お母さんが『工房』から顔をだけを覗かせそう言うのと、ドアをすぐ閉めた。

「はい」

私はお母さんに聞こえたかわからない返事を返し、目の前の椅子に座る。そして目の前の紅茶の入ったカップに口をつける。

「温かい方が、紅茶は美味しいよ？」

カップから、湯気とともに、紅茶のいい香りが顔を覆ってきた。

「でも君、黒猫族だから……熱い飲み物は苦手かな」

相手のいない会話は寂しいものだが、相手のことを考えながらの独り言は、どこことなく、そうは感じなかった。

「さてと ……お祭りいこう」

私は食事を終えて、食器だけは流し台へ運んだ。

そして私は、玄関の側にある『工房』のドアを開けた。

「じゃあ、私、お祭り行ってくるね」

工房のドアを開けると中から、溶けた『にかわ』の臭いが押し寄せてくる。

私はこの臭いが苦手で、滅多なことがない限り、工房には入らないようにしている。お母さんもそれは知っているので、できるだけ私が一階にいる時は、この工房のドアを開けないようにしてくれている。

お母さんは私の声に気づくと、削っていたバイオリンを机に置いた。

「わかったわー楽しんでらっしゃいー！」

「うん、行ってきます！」

その答えにお母さんは微笑み、またバイオリンを削りだした。

私は工房のドアを閉めて、私は玄関から家を出た。

街へ進むにつれ、人と祭り特有の熱気が多くなっていった。

私は、一緒にお祭りに行く予定の友達と、待ち合わせをしている『時計塔』へと急ぐ。

この街で二番目に高い建物である『時計塔』は、この街からのどこからでも見えるので、待ち合わせにとっても便利だ。その他にも一番大きく高い『王城』もあるが、小高い丘の上にあるのと、そんな

ことに王城へと赴くのも、王族の方々に失礼にあたるので、待ち合わせには向かない。

——時計の針は天辺から、緩やかに下降しはじめていた。

「うーん ……寝すぎたかな」

走りながら、いかに自分が長く寝ていたかわかった。

約束の時間にはどうにか間に合い、時計塔の前に着く。

そこには、茶色い長い髪を左右に分けて束ねた友達のケイと……同じ学校の生徒でもある、よく知った男性もいた。

二人は、私に気づくと手を振ってきた。

「アメル……こっち、こっち！」

ケイが笑顔を浮かべ、私に呼びかけた。

私はケイの前まで行くと、隣にいる男性の顔を睨みつけた。

「あなた、なんでいるの？」

「今日はお祭りだからですよ」

男性は微笑みながらそう答えた。

私は若干イライラしながら、腰に両手を当ててもう一度問い直す。

「私は、なんであなたが、ここにいいのか聞いているのよ？」

「そうそうカツカなさるな、アメル嬢」

両方の手の平を前に出し、前後に動かした。

「アメル嬢のご友人が、お暇そうでしたので…… つい、声をかけてしまいました」

彼がケイの方を見ると、ケイはそばかすの残る顔を真っ赤にさせ、緊張したように何回か早くうなづいた。

「では、アメル嬢もお着きになったことですし、邪魔者は消えとしまししょう…… では、またアルベロッタの木の下で」

彼が跪き手の甲へのキスをしようと彼はしてきたが、私はそれを拒んだ。

肩をすくめて立ち上がった彼は、胸に手をあて一礼した。

「御機嫌よう」

私は嫌みったらしく、彼にそう言った。

「そうそう…… アメル嬢」

「なに？ まだ何かあるの？」

「アメル嬢は、私だから拒むのかな？ それとも、君が拒むのは……人という存在をですか？」

「何言ってるの？」

「まあ、お気になさらず…… 少なくとも、本当に少なくとも、そのご友人だけには、心を開かれてるようですし、全く拒むわけでもなさそう……」

「いつか、私にも、その心を開いてくださいね？ では……」
そう言って彼は街の奥へと消えていった。

「ほんとキザで嫌なやつ……」

彼が去ったのを確認し、私はケイにイライラしながら言った。

「そうかな？ 優しくて上品いて……アルベロッタの女生徒の中ではすごく人気があるのよ？」

ケイは彼が去ったその先を、なんとも緊張感のない顔で見続けている。

「え？ アイツが？」

「そうそう！ バイオリン科の主席で、あの甘いマスク！ 王族に匹敵する気品！ そう、才色兼備であの立ち振る舞い…… まさに王子……王子様ね！」

ケイの目は、完全に恋する乙女が目だった。

「王子にね……」

私も彼の去った道を見る。

「私はああいうのが一番苦手かな」

「ああ、勿体無い……！ さすがアメル嬢ですこと……！」
少し怒ったように、ケイがそう言った、

「つまらない話はやめて、お祭りにいきましよう！ 早くしないと日が傾いてきちゃう！ 出店が混む前に、全店制覇よ！」

溜息をつき、ケイは両手をあげた。

「もう……色気より食い気ねアメルは……」

私達は、普段より膨れ上がった街の雑踏の中へと歩き出した――

一通り店を回り、家族と合流するケイと別れて、私は一人『火送り』の時間を広場の片隅で待っていた。

『火送り』とは、祭りのメインイベントで、街の人が持ち寄った古い衣服などを広場の大きな焚き火で燃やす。

なぜこのようなことをするかは、定かではないが、この時期に帰

ってくる魂達が、この上へ上へと昇っていく火と煙を道しるべに、再び天へと魂達が戻っていくとだと言われている。そのため、街の人々は自分達の匂いがついた、身に着けていた衣服を燃やし、少しでも魂達を安心させようと、しているのだという。

私はこの炎が大好きだった。

その謂れのとおり誰かのために燃やす炎は、とても温かく綺麗だった。夜空に昇っていく炎を、人々がみんなで見上げている。

炎の灯りで浮き上がった、街の人達はとても穏やかな顔をしている。そう、この顔を見れるから、私はこの炎が大好きで、毎年かかさず見ている。

「♪〜幾つもの光を目印にするより、君が示す光で行けたなら ……」

「♪〜きつと私は迷わずに、あの空へと旅たてる ……」 「♪〜だから、その炎を絶やさずにいてほしい ……」

「♪〜火が消えた時には私を忘れてほしい ……」 その顔を上げて歩いてください」

「♪〜その顔を上げて歩いてください ……」

この時期によく歌われる歌。亡くなった人

亡くなった人の思いと、それを亡くした者の気持ちがあるならば、きつと、亡くなった人も最後まで、別れを望んではいなかった。

その望みが叶わなかった時、その手で自分を送ってほしい……そして忘れてほしい。亡くなった人が望みを歌った歌は、どこか悲しく寂しい。しかし、前を向いて生きて欲しいのが、本当の亡くなった人の気持ちであると、歌は終わる。

でも、この街の人々は、亡くなった人を忘れることができなかった。でも、こうして毎日、前を向いて —— 生きている。

私はいつまでも昇っていく炎を見上げ続けた。

一水一

arcobaleno 水たまりの

——窓の硝子を叩く雨の音が強くなってきた。

私は読んでいた本を床に置き、立ち上がって窓の前に立つ。
曇った硝子越しに見る外の世界は、空と同じ曇った色だった——

「うーん……」

困った。これからケイと街に出かけないといけないのに、あいにくのこの天気。

「そう簡単には、止まないよね」

昨夜から降り続けている雨、今日の昼になっても止むことなく降り続けていた。

窓の下に、赤い傘を差し歩いてきたケイが見えた。

「あっ、ケイ——」

私は急いで階段を下り、玄関の前へと走った。

「迎えてきてくれて、ありがとうさあ、入って！」

ドアを開けてケイを迎え入れる。

ケイは傘を閉じ、外で数回振って水滴を落とし、傘たてに入れた。
「街に行く通り道だし、私の家で集合よりは、よっぽど現実的よ！」
濡れてしまった、自慢の左右に分かれた長い髪を、ケイは自分のハンカチで押さえている。

「あつちよつと待ってて！　いまタオルもってくるから……　そのソファ―に座って！」

私は一階のリビングにあるソファ―を指差すと、タオルを取りに部屋への階段を上った。下で「おかまいなく」どうせ、また濡れるんですもん」とケイの声が聞こえる。

部屋に入り、クローゼットからタオルを取ると、階段を下りてリビングへ。

「はい、お待たせケイ」

ケイが少し震えながら、私の手渡したタオルを受け取った。

「あ、ありがと……」

「なんだか寒そうね？　いま暖炉に火を入れるわ！それまで、これ使って！」

ケイにリビングにあったタオルケットを手渡す。

「ずううーうう、ありがとー」

鼻水をすすりながら、ケイは何回か頷いた。

暖炉の前へと行き、暖炉に薪をくべ紙に火をつけ点火させる。火が上がるのを確認し、ケイの方へ向く。

ケイは、タオルケットを身体に巻き、すごく寒そうにしている。

「今日の街での買い物は、ケイも辛そうだし、天気もこんなんだし止めとく？」

「うーん……　そうね、少し温まらせてもらったら、このまま家に帰ることにするわ」

「ケイがよければ、雨が止むまで居ていいわよ？」
暖炉に向き直って、新しい薪を何本かくべた。

「でも—— この雨、長そうよ？」

火を見ながら、横目で外を見た。

リビングの大きな窓に、いまでも無数の雨の線が新しくのびている。

ケイの言うとおりに、この雨はすぐには止みそうになかった。

この時期に王都に降る雨は、昔は一年を通しての貴重な水源ともなっていた。しかし、郊外にある山からの水路が整備された今では、そのありがたみは薄れ、私たちの年代ともなれば『厄介雨』と揶揄されていた。

私は、暖炉に向き直り、新たな薪をくべ呟いた。

「本当……『厄介雨』よね」

「♪～雨が止む頃 二人が分かつのであれば ……」

「♪～この雨が二人を分かつのであれば この雨が止めなかれと止むなかれと ……」

「♪～降りしきる雨に打たれ 佇むとも 流れ落ちるモノを隠せない ……」

「♪～ならばいつそ 止む無かれと ……」

雨が止めば、愛しき人が旅立ってしまう。その旅立ちを知らせる雨が、止まないことを願う歌。こんな時に歌う歌ではなかったが、おもわず浮かんできたので、私は歌ってしまった。

昔、人は雨に恵みを求め、降ることを強要し—— 時に、この歌の主人公のように、振り続けることを望むこともある。

いまの私達二人にとっては、そんな昔の人達とは違い、この雨が

止むことを願っている。雨にしてみれば、すごく勝手は話だ。

「あ！ アメル！　なんだか止んできたみたい！」

「え？」

ケイの声で窓の外を見ると、硝子一面に光が射し込んできていた。
「ほんとだ……」　信じられない、さっきまで止む様子がまったく
なかったのに雨が止んでいた。

「じゃあ、お邪魔しました！」

ケイが玄関のドアを元気に開け放った。

「本当に、一人で大丈夫？」

ケイは持ってきた傘を手で地面に打ちつけ、最後の水滴を落とした。
た。

「平気〜平気〜！　家まで一本道だし！」

「そう、じゃあ気をつけて〜明日、アルベロッタで！」

「はいアメル嬢〜アルベロッタの木の下で……」

ケイがあのかげなアイツのマネをしながらそう言った

「もう〜ケイ、怒るわよ！」

私が怒った顔を見ると、ケイは歯みせて笑った。

「じゃあ明日！」

ケイが手を振り、帰り道を歩いていく。

その背中に私も手を振った。

「うん、明日」

道を歩いていく、ケイの背中を見送る。

「なんで急に雨が止んだんだろ……」

歌った直後に、雨が止んだような気がした——　これだけ急に、
天候が変わるのは珍しいことだ。

『歌姫のアメルが望むまま……——』

「ん？」

声が聞こえたような気がして、後ろを振り向く。

しかし、木が少し揺れていたが、誰もいなかった。

「うーん。たしかに、誰かの声が聞こえたんだけど……」
「ん？」

下にある水たまりに、ぼんやりとしたカラフルな線が映っていた。

前を向き空を見上げた。

「これは、雨の贈り物……かな」

そこには、鮮やで大きな虹が空へとかかっていた——

一木

S c h o o l a 木の学園

あれから雨が降ることもなく、今日は雲一つない晴れた空——
こんな天気になるのは、何日ぶりだろうか？

久しぶりの晴れに、お母さんも嬉しそうに洗濯物を干している。

「アメル〜 今日は遅めね」

玄関を出た私に気づき、シーツの間からお母さんが顔を覗かす。

「うん、ちよつと…… ね」

今朝は寝起きが悪かった。

身体はどこか——どこかが欠けてしまったかのような痛みとダルさが、身体を襲ってきた。いまでもその痛みは続いている。

そのせいで、起きてはいたのだけど、なかなかベッドから身体を起こすことができなかった。

「顔色が少し、悪いんじゃない？」

「大丈夫…… 寝つきが悪かったんだとおもう」

「そう〜 あまり無理しないでね」

「うん…… じゃあ、いつてきます〜」

干された白いシーツのなびく中を歩き、街へと向かう。

街への道を歩きながら、私は空に向かい歌う。

「♪この風 髪を揺らし時 ……」

「♪思い出すは 彼の想い ……」

「♪去りし その風の温もりも ……」

「♪やがては 感じぬままに 私は行く ……」

つらい時に歌うと、気持ちも晴れるが、やはり悲しい歌では、晴れるものも晴れない。

でも、こんな具合が悪い時には、そういう歌しか歌えない。
私の感情を表してくれる歌――

この別れの歌は以外と、私の今に合うのかもしれない。だって、早くこの痛みとお別れしたいから――

街の門をくぐり、そのまま大通りを進む――

今日は少し遅めに家を出てしまったので、近道である大通りを行くことにした。

街は既に起きていて、両側の道は通行人で溢れていた。近くからも、遠くからも人の出す音が絶え間なく聞こえてくる。

この雑踏が、目の前を歩く人も、後ろを歩く人も、追い立て急かす。そうまるで、牧羊犬に追い立てられる羊のように――

そんな朝の街が、私は苦手だった。

もう少し早めに出ればよかった―― 少し後悔した。
できるだけ早足で大通りを抜けることにした。

段々と丘の上にある城が見えてきた時、目の前に大きな木が現れ

る。

深緑の葉を湛えし、古き巨木――

その周囲を囲うよう、円形に乳白色の壁がそびえ立ち、壁には無数の長方形の窓が、等間隔に並んでいる。

ここは『アルベロッタ』

私の通う、王立音楽院だ。

この円形のコロッセオみたいな建物は、古の昔から此処にあり、その建物を利用し、アルベロッタの校舎として使用していた。

ここまで来ると、周囲には私と同じ制服を着た生徒が増え、周囲より「ごきげんよう」という挨拶が聞こえてくる。

「ごきげんよう、アメル」

不意に背中から、挨拶をされた。

「ごきげんよ…… う」

作り笑いをし振り向くと、そこにはケイが立っていた。

「なんだ、ケイじゃない」

ケイがムスっとした顔をする。

「なんだとは、朝からヒドイですわね、アメル嬢！」

「ヒドイのはケイでしょう！ 誰かと思ったわよ」

私は向き直って、ケイを置いて、校舎へと延びる赤いレンガの道に行く。

ケイは小走りで隣に並んできた。

「ち、ちょっと待ってよ! ……もしかして怒った?」
横目で見ると、ケイが少し焦った顔をしている。

私は前を向いたまま、人差し指を立てた。

「こんなことで怒ってたら、私は今でも一人で、この道を歩いていたでしょうね」

指を下ろし、ケイのいる横を向く。

「でも毎日、こうしてケイと歩いてる…… 不思議ね」

「アメルは人と話さないしね」

「そう? こうして、ケイと話してるじゃない」

「私以外、私以外とよ! アメルは、それだけでなくとも話しかられにくいのに」

「そうなの?」 ケイの言うとおり、私はこの学園であまり話しかけられることはなかった。

もともと自分から話しけるタイプの人間でもなかったので、それほど気にはしていなかった。

「いい? 容姿端麗さに、その天使のような美声…… どれだけのアメルのファンが学園にいることか」

「え? ファンなんかいたの?」

初耳だった。人前で歌うのも授業のみだし、人に好かれるほどの行動も付き合いも、してるつもりもなかった。

「知らなかった? よく、あなたを見てる…… ええっと…… そ

う！ あそこの集団！」

「あの子達が、あなたのファンよ！」

ケイが指差した先に、かなりの人数の集団が校舎前で待ち構えていて、こちらを見ていた。ほとんどが女子だったが、中には男子の姿もあった。

「へー そうだったんだ」

「へー ……じゃないわよ！ 今まで何だとおもってたの？」

「待ち合わせ？」

「あんな集団の待ち合わせなんてないから！ もうー……」
ケイが頭をかかえている。

「そう、あまり興味がなかったから」

私は集団の視線を気にせず、前を通り過ぎ、校舎への階段を上がった。

「さすがアメル嬢…… 大物だね」
深くケイがうなづいている。

そんな朝の会話をしながら、ケイと私は校舎へと入っていった――

一金

V o c e 金色の中庭

校舎に入ると、目の前に大きな螺旋階段が現れる。
階段は、吹き抜けの空間を円を描きながら、上へと長くのびている。

「じゃあ、あとで遊びに行くからね！」
そうケイが言いながら手を振り、一階の自分の教室へと歩いていった。

科の違うケイとは、この階段の前で別れ
私は、階段をゆっくりと上がっていく。

最上階へ残すところ、数段になったとき、上を見上げると
そこには朝には会いたくなかった『アイツ』がいた。
「毎朝毎朝、ご苦勞様ですねアメル嬢。……女性には、この階段
はいささか酷ですよね」

「そうかしら？ 私には全然、気にならないわね。
むしろ、いい運動になって、身体がほぐれ、声が出しやすくなる
わ」

「さすが、アルベロッタの紅き歌姫ですね」

「馬鹿にしてるの？」

「いえいえ、そんなことは……むしろ称え——」
彼の言葉を制するように、私は話し出した。

「で、ここでも何してるわけ？ 最上階は声楽科の教室しかないわよ？
あなたの科は、この下でしょう？」

「ああ…… 声楽科の子達に、伴奏を頼まれましたね」
手に持ったバイオリンケースを、軽く持ち上げ私に見せた。

「アカペラよりも、何かしらの調べにのせたほうが、歌いやすいとか」

「そう…… もう、終わったんでしょう？」

「はい。 今し方、やっと解放してくれましたよ」

「二、三曲のつもりが、次から次へと、新たな子達が登校してきて、さらなるリクエストを頂きまして、気づけば、朝から十数曲も演奏してしまいましたよ。」 「でも、私の音を求めていただけるのは、嬉しいものですね」

そう言って苦笑いを浮かべたあと、少し嬉しそうな顔をした。

「そう？ 求められたのは、あなたの『音』じゃなくて、あなた『自身』じゃなくて？」

私にはよくわからないが、この目の前のこいつは『王子』と呼ばれる、生徒達の中でかなりの人気があるらしい。

（と、ケイが言っていたっけ）

「そうかも…… 知れませんか」
彼はまた苦笑いを浮かべた。

「そうよ。間違いないからね」

「ハッキリとおっしゃりますね」

「でも、仮にそうだったとしても——」

「だから、そうだって……」

彼は軽く手の平を前にだして、私を制した。

「そうだったとしてもです。私の奏でた音で歌い、一つの調べとなったことは事実——その音には、偽りがないんじゃないですか？」

「その調べを創りだすことに携われたのは、音楽家にとって一番榮しく光榮なこと」……だから、理由はどうあれ、人のために演奏するのは私は好きですよ。アメル嬢もそうではないですか？」

「私には……わからない」

「わからない……とは？」

不思議そうな顔で彼は私を見てきた。

「人のために、誰かのためになんか、私は歌ったことがないから」

「では、アメル嬢……あなたは誰のために歌っているのですか？」

「それは——」

私が彼の問いに答えかけた時、頭上から『アルベロッタの大鐘』が高らかに鳴り響いた。

彼を私は顔を見合わせた。そして、彼が口を開く。

「時間ようですね。私は自分の教室へ帰ることにします。……」

では、またお会いしましょうアメル嬢」

そう言って私の横を通り抜けて、階段を下りていく。

「そうそう」

背後から、彼の声がしたので私は振り向いた。

「あなたが言おうとしてた答え――」

やはり、あなたは私以外にも、心は開いていらっしやらないようですね…… では」

彼は胸に手を当てて一礼し、階段を下りていった。

（誰のため…… そんなのわからない）

しばらく、その場で彼の背中を見送り、私は教室へゆっくりと歩き出した。

「――」

授業はいつものように始まり、そして終わる。

それを何回か繰り返す――

（私は何のため、アルベロッタに入ったのだろう）

いつも漠然と浮かんでき、疑問とも不安ともつかない思いと感情――

『……あなたは誰のために歌っているのですか？』

さっき言われ、彼の言葉をフツと思い出す。

（どちらも、今の私はわからない）

今日は、朝から気分が良くなった。そして、アルベロッタに登校しても、彼との会話や、投げかけられた言葉の重み、そしていつもの疑問と不安――

（なんだか疲れた……）

教壇からの視線を窓の外へと移す。

窓は校舎の中庭に面していて、そこからは、深緑の葉達を揺らし、太陽の金色の光を散す『アルベロッタ大樹が』見える。

（あなたは、何でそこにいるの？）

古の大樹に心の中で問う。

「――……」

大樹に問いかけた瞬間、耳に微かに『声』が聞こえた。

（ん？ いま誰かの声が ……聞こえて）

――その時、アルベロッタの大鐘が鳴った。

「では、ここで授業を終わります」

そう言って先生が教室を出ていった。

その瞬間、生徒達の声で教室は溢れ返った。聞こえてくるのはその声だけで、あの『声』は聞こえなくなっていた。

「アメル！ アメル〜！」

教室の出入り口から、ケイの声がした。

「アメル……」

「何、ケイ？」

ケイが神妙な顔つきで、私の席まできた。

「待ちに待った……」

「待ちに…… 待った？」

「お昼ご飯だよ！！！」

ケイの目がキラキラと輝いている。

「ああ……」

私は席を立ち、顔の前で両手の手のひらを合わせた。

「ごめんケイ！ 今日はお腹空いてなくて…… 少々具合も悪いから、ちょっと先に中庭にいったらいいわ」

「そ、そう、大丈夫？」

私はケイに軽くうなづいた。

「じゃあ、昼食を食べたら、私もいくわね！」
少し残念そうな顔でケイは言った。

「うん、じゃあ後でね」

私は教室を出て行く。

「いつもの場所で！」

背中から聞こえてきたケイの声に、片手をあげて答えた。

長い螺旋階段を下りて

私は一人、金色の光に溢れた中庭へと立った――

一土一

giardino 土色の壁

私は校舎を出ると真っ直ぐに、庭のベンチへと歩いていく。

土の匂いが鼻へと流れてきて、続いて庭に咲く花の香りも遅れてやってくる。

周囲を土色の校舎に囲まれた、中庭には燦々たる太陽の光が降り注いでいて、金色の温かさに包まれていた。そこに吹き抜ける風も、またやさしく、頬をスツとかすめ吹いていく。

そんな庭に、佇む大きなアルベロツタの大樹――

私は大樹の側にある、小さなベンチに腰掛けた。

上を見上げると、ひらひらと揺れる葉から、光が零れ落ちている。大きく息を吸い込み、瞼をゆつくりと閉じた。

（静か……ほんとうに、静か……）

耳には、さっきまでの人が話す声や、動く音など一切聞こえてこない。自分が、まだ学校にいることさえ、忘れてしまいそうだった。

ゆつくりとした時が流れていく――

「――……」

（……ん？）

耳にまた、あの声が聞こえた。

（誰……誰なの？）

目をそっと開けると――そこは
光に溢れた世界だった――

（ここは……）

夢で見た世界に似ていた。

しかし一つ違うことがあった。

それは、目の前にアルペロッタの大樹があること――

私は歩いて、大樹に近づいていった。

「――……」

近づくにつれて声が大きく、鮮明に聞こえてきた

「――だ……め」

（え？）

「来ては――だめだ！」

そうハッキリと聞こえ瞬間、世界は白から黒の世界へと変貌し姿を変えた。

世界に闇の臭気が溢れてきた時、目の前の地面から闇の塊が現れた。

「な、なに?!」

思わず後ずさる。

闇の塊は、脈打つように蠢きながら形を変えていき、やがて人の形を成した。

「やっと……会えた」

闇の塊が真っ赤な口を開き、まるで笑っているようだった。

聞こえてきた声は、直接頭に響いてくるような声――その声に体の底から恐怖が押し寄せてきた。

そんな私を察したのか、闇に塊は少しだけ私から離れた。

「フフ……そんなに怖がらないで」

「あ、あなたは誰？」

「ボク？　ボクはね……」

闇の塊が一気に私の顔の側まで寄ってきた。

「ボクは……君だよ！」

そう言った瞬間、闇の塊の顔は、私の顔へと変化し――歪な笑顔を浮かべた。

「い、いや!!!!」

私は大きな声で叫び、目を閉じた。

(助けて……誰か)

「大丈夫」

「え？」

闇の塊の声とは違う、やさしい声が頭に響いてきた。

「大丈夫だよ」

闇の世界の天井から、私の足元に一筋の光が射してきた。闇は、その光から逃げるように光を避けいき、やがて地面へと光が届くと、そこに光の塊が現れ始めた。

そして、光の塊は人の形を成し、見覚えのある姿へと変化した。

「リオ……リオ君？」

「助けに来ましたよ、麗しき歌姫様」

そう黒猫の獣人は、私に微笑んだ。

こんな軽口を平気で叩くのは、間違いなく私の知るリオ君だった。
「あれ？ アメル様ったら、いまヒドイこと頭の中で言ってますませんでした？」

リオがむすっとした表情を浮かべた。

「そ、そんなことしてるわけないでしょう！ って勝手に私の頭の中を覗かないでくれる？」

「あ！ 覗いたって言いました！ 言いましたよね？ じゃあ、ほんとにヒドイことおもってたんですね!？」

「ああ、もう！ そんなことより、君！ 早く私を助けなさいよ！」

「なんか……アメル様、偉そうですね？」

「う、うるさい！ 早く早く！」

リオの胸倉を掴み上げ、激しく揺さぶった。

「あは……は、はい、た、助けますから、離して……は、離してください」

「ほんと？」

「ええ……しばしお待ちを」

乱れた服を調べて、リオは私の前に立った。

「あ……」

「あ？」

「その前に……」

「その前に？」

「その後ろにいるのを、どうにかしないといけませんね」

リオが指差した先には、闇の塊がゆらゆらと蠢いていた。

「うわ！……わ、忘れてた！」

私は急いで、リオの背中へ隠れた。

「は、早く！ 君、あれを早くどうにかしなさいよ！」

「うゝん」

「唸ってないで早く！」

「どうやって……やりましょう」

「……え？」

「いや、どうやって……やればいいのか……」

「あんた……なら、何で助けにきたのよ」

「ぼ、ボクは本来、武官ではなく文官の気質な部分がございまして

……」

「頼りないなゝ君は……」

「すいませんです」

リオは両耳を垂れ下げうな垂れた。

「でも、本当にどうしたら」

私が不安な表情を浮かべていると、リオ君は微笑んで私の手を握ってきた。

「大丈夫ですよ！ ボク一人では無理ですが……歌姫の力があれば、大丈夫です！」

「私の力？」

「そう、歌姫のアメルのお力です！」

「私に……そんな力なんか」

「あるんです！」

リオが興奮気味に、握った手を強く握ってきた。

「そ、そう？」

「はい！」

「で……私は、何をすればいいの？」

「歌ってください」

「え？」

「歌うのです！」

「いまは、そんな時じゃないわよ！」

「いいえ、あなたの歌う歌は、人の心にとっても響いてきます……
そんな、あなたの声には、闇を払う力があるのです」

「そんな……」

「騙されたとおもって、さあ、歌ってください！」

「え……ええ、じゃあ……」

私はリオ君に促されて、歌いだした――

「草木を揺らし 風は行く」

「私から あなたへ流れる この風に」

「このまま私をのせて 行ければと」

「切に願い またこの丘に私は立つ」

「彼の地のあなたを思い ここに立ち 今日も待つ」

戦地の恋人の帰還を願い、再会を願う、若き娘の唄だ。

こんな場所で歌う歌ではなかったが、私にも帰る場所はある、
帰りたい場所ある――

そう思った時に、この歌が思い浮かんだ。

歌っている時から、周囲を覆っていた、冷たい闇が晴れていった。
そして、黒の世界は、白の世界へと戻っていった。

「くっ……」

私の顔をした黒い塊が、苦しそうな声をあげて揺れた。

「もう……一押しですね」

そう言うと、リオも歌いだした――

『水面を揺らし 風は行く』

『我から 君へ吹く この風に』

『いっそ乗って 行ければと』

『願い 今日も戦地に行く』

『明日に 故郷の土を 踏むために』

二人で歌い合うと、黒い塊が咆哮をあげて激しく揺れていた。

「うつ……ぐおお……!!」

そして闇の塊は脈打ちながら、段々と地面へと消えていった。

「消えた……」

「ねえ？ 言ったとおりでしょう？」

「う、うん……だけど」

「あれは、なんだったんだろ……それに、君はなんで、ここに来れたの？」

「それは……」

その時、地響きとともに、激しく揺れた。

「な、なによこれは！」

「ああ、もう時間のようですね……力の均衡が壊れて、この世界はもう終わります」

「終わる？」

「はい、ですから、急いでこの世界を出ないと」

「で、でもどうやって……」

リオは大樹を指差した。

「あのアルベロッタの大樹に触れてください」

「それだけ？」

「はい！ あの大樹は、この世界と元の世界に繋がっています」

「さあ、急いで！」

「わかった！」

私とリオは、走って大樹へと急いだ。

大樹に近づき、手を触れようとした瞬間、黒い線が足に纏まり付いてきた。

「な、なによ!？」

線が伸びてきた先には、あの黒い塊がいた。

「にが……にがさ……ない」

黒い塊が赤い口を開けて、こちらを見ている。

「また出た!」

「しょうがないですね……」

リオは、私の足に纏わりついた線を引き剥がした。

「あ……ありがとう」

「いえいえ」

リオはやさしく笑った。

「ですが……どうやら、ボク達を簡単には、帰してくれないみたいです」

「どうすれば……」

「先に行ってください」

「え……でも……」

「いいから早く行ってください!」

リオは私をそっと押し返した。

そして私は大樹に触れて、徐々に身体が薄くなっていった。

「また……お会いしましょうね」

リオがそう笑って、闇の塊へと歩いていった。

「り、リオ君!」

私は光に包まれていった――

そして目を開けると、そこは――
ベッドの上だった。

「ここは……?」

「目を覚ましましたか」

声が出た方をみると、そこにはアイツが座っていた。

「あんた、なんでここに？」

「さて……なんででしょうね？」

「あんたと、じゃれ合ってる気分じゃないんですけど？」

「それだけ元気があれば、もう大丈夫そうですね」

「え？」

「さすが、アルベロッタの紅き歌姫ですね」

「それって関係あるの？」

「ない……かもしれませんね」

彼が微笑み笑った。

「で、私……」

「ああ、中庭で倒れていたんですよ……それで、この保健室まで、私が運んできたのです」

「そうだったんだ……」

あれは夢だったのか——でも、体中に疲れを感じる。

「そうそう……ヒスイです」

「え？」

「私にはちゃんとヒスイという名があります」

「し、知ってるわよ……」

「おや？ 一回も呼んでいただけでないので、お忘れかとおもいましたよ」

ヒスイは、にやりと笑うと席を立った。

「えっ……もう、行くの？ もしかして……怒った？」

「いやいや、まだ授業もありますし、この子を」

そう言っ、ヒスイが後ろを向くと、そこには白い猫耳をぴくぴくさせた、獣人族の子が立っていた。

「帰らせないといけないので」

ヒスイはやさしく微笑みながら、獣人の子の頭を撫でた。

「この子が、アメル嬢を見つけてくれたんですよ」

「そうだったの……ありがとね！ え〜つと……」

「……ルウ」

獣人の子が、私の方へ歩いてきた。

「ん？」

「ボクね、ルウっていうの」

「そう、ルウちゃんか……ルウちゃん、ありがとね」

「うん！」

ルウは、私の顔を見て微笑む。

「これはこれは……珍しいですね」

ヒスイも私の方へ歩いてきた。

そして、ルウの頭を撫でた。

「この子は人見知りが激しく、ひどく臆病でしてね……自分で、こ
うやって挨拶するのは、初めて見ましたよ」

「そう……ヒスイとは、全然違うのね」

「やっと、名前を呼んでくれましたね」

「え……これは、その……偶然よ！ 偶然！」

「ふふ、その偶然に感謝しつつ、失礼しますね」

ヒスイは、軽く胸のあたりに手を会釈する。

ルウも、それをマネするように、慌てて私に頭を下げた。

「うん、色々と迷惑かけたわね……ありがと」

「いえいえ、では」

ヒスイとルウが部屋から出ていった。ルウが最後に軽く手を振っ
た。

私も、それに答えるように、軽く手を振りかえした。

（さて……）

私はもう少し、保健室で休むことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2679f/>

Ecco la canzone[エッコラカンツォーネ]

2010年11月13日14時55分発行